

Z-GIS

全農 営農管理システム



garvio® FIELD MANAGER

powered by BASF

活用ガイド2024/2025

CASE-1

ガルビオFM活用で水稻の収量アップ、大豆の品質向上

秋田県 農事組合法人 はたやファーム JA秋田なまはげ

CASE-2

GAPの団体認証取得に
Z-GISを活用し
スマート農業化を推進

埼玉県 JA埼玉ひびきの

CASE-3

ガルビオFMの
マップ機能を駆使して
栽培コストを低減

兵庫県
株式会社 アグリヘルシーファーム

CASE-4

中山間地域の不利な圃場条件を
スマート農業で克服!

高知県 JA高知県 一般社団法人 四万十農産

CASE-5

産地の雑草対策を担う
ガルビオFMの雑草管理プログラム

大分県 JAおおいた 株式会社 浜小路農園

全国で利用農家が拡大中!!

全農



ギャルビオFM活用で、水稻の収量アップ&倒伏軽減 適期作業で大豆の品質向上

農事組合法人 はたやファーム JA秋田なまはげ

基肥可変施肥のメリットを実感し、 田植機を可変施肥仕様に更新

JA秋田なまはげは、県庁所在地の秋田市となまはげで有名な男鹿市、潟上市の一部にまたがる広域JAで、管内では水稻をはじめ、昼夜の寒暖差を活かして菊やダリアなどの花き、梨などの果樹が生産されています。

農事組合法人はたやファームは秋田市の南に位置し、2024年は水稻約40ha、大豆約15haに加え、枝豆、ねぎ、カボチャを栽培しています。圃場整備事業に伴って設立された農事組合法人で、足利代表は法人設立前からヤンマーの密苗栽培をいち早く導入し、法人化した後も水稻栽培は密苗栽培を継続するなど、効率のよい生産に力を入れてきました。ギャルビオFMを活用した栽培をJAから提案された際も「新しい技術は試してみなければわからない」とその仕組みに関心をもち、快く実証に取り組むことになりました。

はたやファームでは、ヤンマー田植機でのギャルビオFM可変施肥を2022年～23年の2年間継続して実施しました。さらに生育ムラの解消に手ごたえを感じてきた2023年の収穫後に田植機を可変施肥仕様に更新し、令和6年産(2024年)からは複数圃

場で可変施肥を行う体制を整えました。そして、これを機に秋田県において基肥可変施肥を行うことで、どのようなメリットが出るのかを徹底検証することになりました(9圃場、838aで実施)。

倒伏が軽減され、収量ムラが解消 されたことで収穫効率アップ

可変施肥を行った圃場では前年(均一施肥)と比較し、生育マップで確認できる生育ムラは改善(図1)し、収量マップではばらつきが抑えられ(図2)、9圃場中2圃場で収量が増加し、1圃場で昨年同等の収量でした(残りの6圃場は収量の比較ができませんでした)。

また9圃場のうち、1圃場で全面倒伏、2圃場で部分倒伏(倒伏程度2～3)したもの、残りの6圃場では倒伏しなかったことから可変施肥で生育ムラを解消することで、倒伏軽減効果があることもわかりました。

倒伏した可変施肥圃場の周辺は地力が高く、2024年8月15日の時点では倒伏した圃場も散見されましたが、当該圃場では可変施肥を行ったことで生育ムラが抑えられ、9月初旬までは倒伏しませんでした(9/5の風雨後に倒伏確認)。

ギャルビオFMで防除作業のタイミング を把握し、雑草・紫斑病を抑制

はたやファームでは水稻栽培と並ぶ経営の柱として2023年から大豆栽培に取り組み、翌24年には面積を広げて本格的に栽培を開始しました。23年は大豆栽培に関する知識が少ないことに加え、夏場の猛暑で防除作業をいつ行えばよいのか判断が

可変施肥を実施した圃場の地力マップで地力ムラを確認

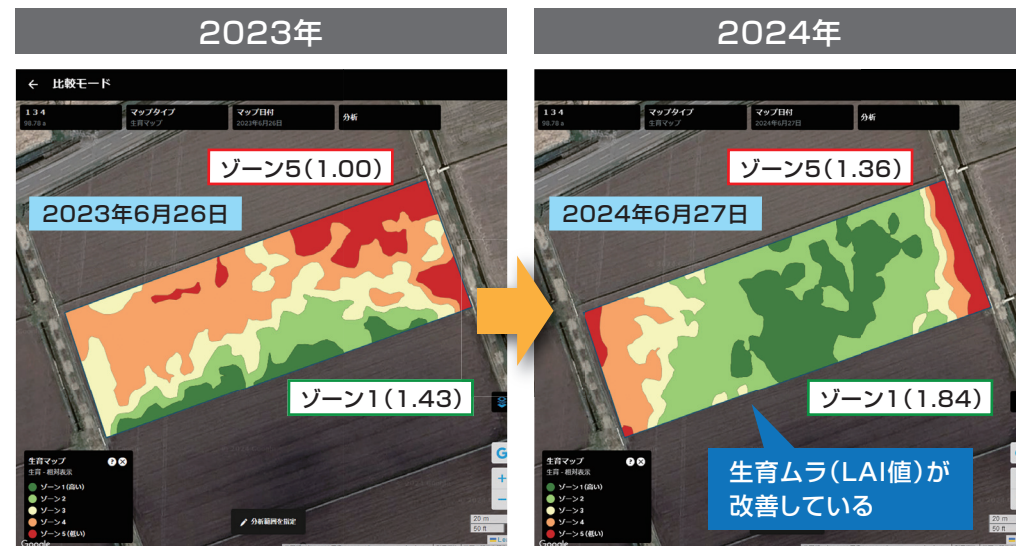
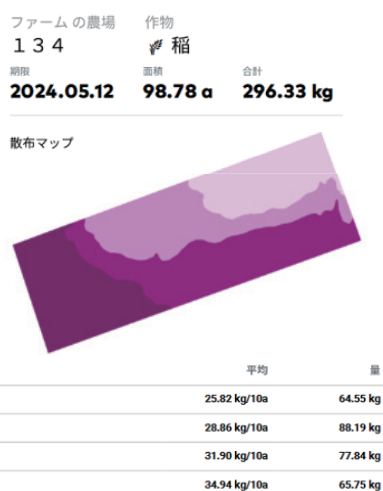


図1 ギャルビオFMの生育マップで生育ムラが改善されたことが確認できた

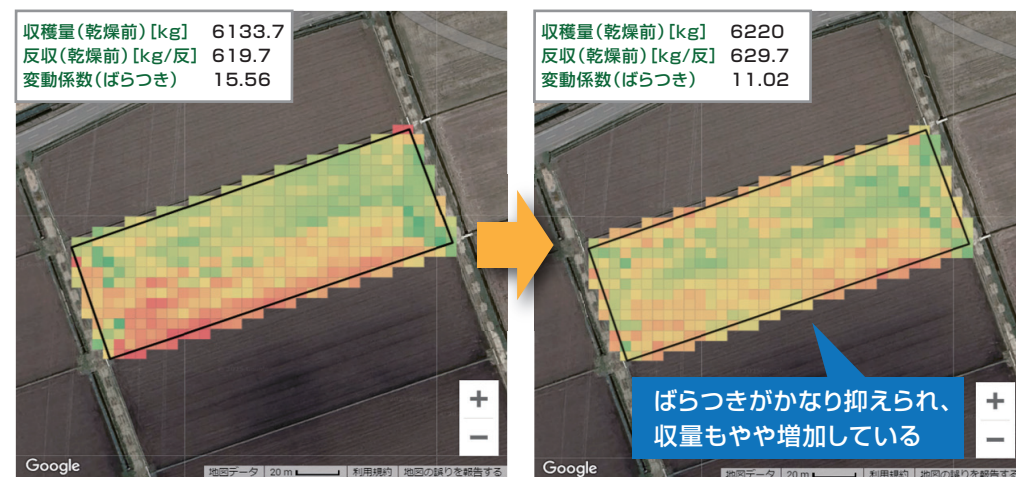


図2 収量マップでは、ばらつきが抑えられ収量も増加したことが確認できた

難しい状況となり、紫斑病などの被害を受けました。

そこで、ギャルビオFMの生育ステージ予測機能に着目し、前半は雑草管理プログラムによる効率的な雑草防除、後半は紫斑病対策剤の散布タイミングを図ることや収穫適期の判断に活用することになりました。

雑草防除: 雑草管理プログラムの作業推奨アラートに従って、茎葉処理剤の散布や中耕培土を実施したことにより、圃場の雑草を抑制できました。雑草管理プログラムを的確に

活用するためには、大豆の発芽後にギャルビオFMが示す生育ステージと実際の生育が合致しているかを確認し、大豆の成長に合わせて作業を行うことが重要になります。

紫斑病対策: 秋田県の大豆指導指針では、防除価を最大化させるため、紫斑病対策の殺菌剤を開花から20日後～30日後の間で散布することが推奨されています。今回、はたやファームでは、生育ステージ予測機能で開花期をしっかりと捉え、殺菌剤の散布計画を立てました。

実証圃場では、2024年8月3日に生育ステージが50%開花(BBCH65)を迎え、その27日後の8月30日にトライフロアブルを散布しました。坪刈りでの収穫後調査では、全重

に占める被害粒(紫斑病以外も含む)の重量割合は5.86%と、ギャルビオFMの機能を活用したことで紫斑病の抑制につながりました。

またギャルビオFMでの成熟期(BBCH89)到達予測が圃場の見た目より早かったため、黄葉期(BBCH81)で生育ステージを編集したことで、予測が修正され、的確な収穫時期を示してくれました。

はたやファームでは水稻と大豆でギャルビオFMを活用し始めましたが「操作や日々の推奨事項を確認するポイントを抑えれば、誰でも使うことができる」と足利代表も太鼓判を押されていました。はたやファームでは、今後もギャルビオFMを活用して、一定の収量・品質を保ちつつ、作業員に無理のない効率的な農業をめざしていきます。



2024年9月13日の大豆圃場。大豆の背丈を超える雑草は見当たらない



GAPの団体認証取得にZ-GISを活用し スマート農業化を推進

JA埼玉ひびきの

ブロッコリー生産者の団体認証取得 をめざして

JA埼玉ひびきのは、本店のある埼玉県本庄市と近隣の土上町、美里町、神川町を含めた1市3町を管轄とする埼玉県北部のJAです。東京近郊という立地を生かした野菜栽培が盛んで、上越新幹線と関越自動車道が横切る広い丘陵地帯に畑と住宅が点在する地域です。

同JAでは2022年8月、JA全農さいたま園芸販売部と協力し、大手コンビニチェーン向けブロッコリーの生産者を対象にGAPの団体認証を行うことを決め、JAグループGAP支援事業要領を活用し進めてきました。また、GAPの導入に際して、生産者の作業軽減とスマート農業化を目的にZ-GISの導入を同時に進めることにしました。

Z-GISは、GAPに必要な圃場の地図や危険地区の表示などを簡単に作ることができます。ただし、圃

場情報のZ-GIS化をJA担当者や生産者で行うことは操作の習熟に時間がかかるため、JA全中GAPアドバイザーの提案でZ-GISデータの入力支援サービスを利用しました。

GAP管理に必要な情報を Z-GISで管理

GAPに基づく管理を行う上で必要なものに、農場管理の見える化があります。具体的にはGAP適用範囲の明確化・地図の整備が求められており、リスク評価に活用するため、**圃場・農産物取扱施設・倉庫保管庫・廃棄物保管場所・生産工程で利用する取水場所・貯水場所・圃場に隣接する土地の利用状況・農薬の残液洗浄水の処理場所が掲載された地図が必要です。**それらはすべてひとつの地図になっている必要はなく、Z-GISで表示可能な圃場関連の情報の表示と、自宅を含む敷地の簡易地図(手書き等での施設位置



赤城山と榛名山を遠くに臨む圃場でGAP審査員と現地視察



農機保管庫をGAP審査員とめぐる生産者。燃料保管場所が指定されているかなど確認する

関係の表示)が用意できていれば、「地図を作成する」とした適合基準を満たしていると言えます。そのため今回の審査では、Z-GISで管理する範囲を圃場の地番情報(面積・地番・栽培品目・そのほか危険箇所情報等)としました。

今回の取り組みに際しては、JA担当者と生産者ともに操作研修会でZ-GISの操作を習熟し、また、生産者には圃場図の確認のため職員が巡回を行うこと、その時に地番を含めた圃場情報が必要であることを説明しました。実際に巡回確認した情報は、とりまとめた上で入力代行業者に送付し、約1カ月後にデータが届きました。

委託しているとはいえ、現場の情報は完全ではないため、委託先で作成されたデータを生産者が確認し不備を直す、手間のかかる作業となりました。同時に、巡回時に危険箇所情報も収集したため、圃場地図に加えました。

途中、GAPの仕様が改定されるというアクシデントもありましたが、JA全中のGAPアドバイザーの協力もあり、一部書類の体裁を変えるだけで対応することができました。アドバイザーからは「帳票類は、必要事項が記載されたもので確定し、生産者に記載さ



肥料保管場所を審査員とめぐる生産者。整理整頓されているのを確認する

せ、JAでの代行入力は避ける」「無理なこと特別なことをしなくても良いので法令順守等のやるべきことをきちんとこなしていく」などGAP継続に必要な提案をいただきました。

いままで受けた2度の審査では、指摘事項が数点ありましたが、前向きに対処できるものばかりでした。むしろ、JAの提供するGAP管理マニュアルの改善のために必要な情報を得ることができ、GAP指導員の言っていたことを実践できる機会であったと思います。

GAP認証取得を機に スマート農業化を加速

当初は生産者11名の団体認証としてスタートしましたが、令和6年度は11名を追加し、管理圃場約2000筆22名でGAPに取り組んでいます。JA担当者としては「取得したGAP認証を維持し、生産者とJAが協力しながら顧客(大手コンビニチェーン等)向け青果物(ブロッコリー・キャベツ・レタス)の出荷を行ってきたい」「生産者のスマート農業化をめざし、Z-GISをGAP管理だけにとどめず、通常の管理にも使うよう勧めていきたい」と考えています。

JA埼玉ひびきののZ-GISを活用したGAP管理は、生産者を巻き込みながら顧客ニーズをかなえる取り組みです。また、生産者にとってもGAP認証における作業軽減とスマート農業を始める機会としてZ-GISの導入を促していきます。



海外雇用者がいるため母国語で表示されたゴミ箱などを現地確認する



住宅街にあるキャベツ畑で水栓場所を確認しZ-GISに反映させる



ザルビオFMのマップ機能で施肥量をコントロール 収量を維持しつつ栽培コストを低減

株式会社 アグリヘルシーファーム

点在する圃場の管理や 高温による収量・品質の低下に苦戦

丹波篠山市は兵庫県の中東部に位置し、主な特産物には丹波篠山黒大豆や丹波篠山山の芋、丹波栗などがあり、中でも丹波篠山黒大豆は全国的にも有名です。株式会社アグリヘルシーファーム（以下、同社）は、丹波篠山市で主に水稻や黒大豆、黒枝豆を栽培しており、作付面積は約87haです。また、圃場数は約500筆あり、社長を含む8名でそれらを管理しています。しかし500筆の圃場は、市内全域に点在し、遠いところは20～30kmほど離れており、移動だけで30分かかってしまう圃場もあります。

また、近年は気候変動による水稻の収量・品質の低下に及ぼす影響が懸念されているため、同社では、人工衛星画像や気象データに基づく生育解析・予測、病害の早期アラート等のタイムリーな情報をパソコンやスマートフォンで確認できるザルビオFMに注目し、生産の安定化、農業経営の効率化を目的に2022年4月から導入しました。

導入当初は、主に生育予測機能を参考にした作業計画への反映や従業員への作業指示にザルビオFMを利用していましたが、近年夏場の高温による肥料切れが課題となっていたことから、導入3年目となる今年度は、ザルビオFMの植生マップ(NDVI値の解

析)機能を活用した生育状況の把握と追肥判断を行うことにより、基肥を削減しても慣行栽培並みの収量・品質の確保をめざし、試験に取り組みました。

ザルビオFMとドローンセンシングを 駆使して追肥を判断

植生マップによる追肥判断では、雲の影響などにより、追肥判断を行うための幼穂形成期(出穂3週間前)のNDVI値が、ザルビオFMでは確認できなかったため、ドローンセンシング(P4 Multispectral)でNDVI値を解析し、追肥判断(追肥なし:1圃場、追肥あり:5圃場)を行いました。

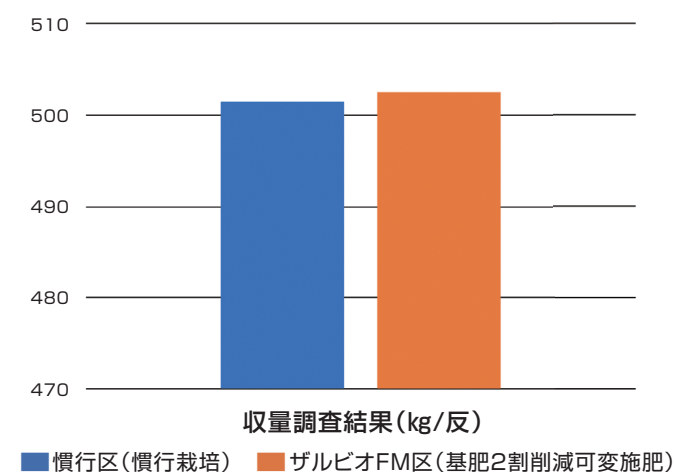
その結果、慣行栽培と同等の収量・品質を確保することができました。梅雨の時期における人工衛星データの解析回数が少ないことが課題ですが、ドローンで解析したNDVI値とザルビオFMのNDVI値には高い正の相関関係(相関係数0.91)が認められたことから、追肥判断においてザルビオFMのNDVI値を参考にできると考えており、今後も継続して取り組みます。

ザルビオFMを活用した可変施肥で 基肥を削減!

アグリヘルシーファームでは、昨今の肥料資材高騰

の情勢から、コスト低減の一環として基肥の削減を検討しており、ザルビオFMの可変施肥機能を活用できるのではないかと考えました。ザルビオFMはシステム上で簡単に可変施肥マップを作成することができます。この機能を活用することで、圃場内の地力に合わせて施肥量を調整できるため、ムダの無い肥培管理ができ、減肥に繋がると期待し試験を計画しました。

基肥は前年の施用量より20%削減し、ザルビオFMの地力マップを基に可変施肥マップを作成して、ザルビオFMとシステム連携可能なスマート農機とデータ連携させ基肥の可変施肥を行いました。結果



慣行区と可変施肥を実施したザルビオFM区の収量比較グラフ

としては、基肥を20%削減してもザルビオFMの可変施肥マップを基に可変施肥をすれば、慣行区と同程度の収量が得られるという可能性が示され、肥料コストの削減が期待されました。

また、可変施肥マップを農機が読み取り、自動で可変施肥できるため、オペレーターは慣行栽培と同様の作業負担で済むことから、スタッフの間でも高く評価されました。

スマート農業を活用し 丹波篠山の農業を盛り上げたい

今回同社がトライした植生マップ・地力マップの技術は、圃場内での生育の傾向が長年の衛星データから見える化できる点がとても優れており、そのデータを基に葉色から追肥の判断をしたり、施肥量をコントロールすることで収量を維持しつつ栽培コストを低減できる可能性があります。今後、同社ではザルビオFMのさらなるデータの蓄積により、効果の検証と可変施肥手法の検討を進めていきます。

同社の農場長庄司さんは「今年は倒伏もなく、今までで最も上手く圃場管理できた」と手応えを感じています。また、同社の原社長は「スマート農業技術を活用し、これからも丹波篠山の農業を盛り上げていきたい」と話しています。



スマート農機と連携した田植え同時可変施肥の様子



アグリヘルシーファームのスタッフの皆さん



経営改善の最強ツール ギャルビオFM+可変施肥 中山間地域の不利な圃場条件をスマート農業で克服!

JA高知県 一般社団法人 四万十農産

中山間地農業の課題解決へ ギャルビオFMに着目

高知県高岡郡四万十町は、日本最後の清流と言われる「四万十川」の美しい水と昼夜の寒暖差により美味しいお米ができる地域であり、高知県のブランド米として古くから知られている仁井田米の発祥の地です。しかし、この美味しいお米ができる背景には、中山間地域ならではの課題が多く存在しています。

中山間地域の課題

1. 圃場が比較的小規模で点在している。
2. 同一法人が管理する圃場でも標高差があるため生育に差が出る。
3. 労働力不足が進んでいる。

JA高知県の竹内さんは、中山間地域の持続可能な農業生産を守るため、2023年にギャルビオFMに着目し効果検証を行いました。水田10圃場で延べ300株分の草丈、茎数、SPAD(葉色)を測定し、ギャルビオFMの人工衛星解析機能から取得できるNDVI値(植生の分布状況や活性を表す指標)との相関を確認したところ、図1のように非常に高い相関があることがわかりました。

これにより、今まで目視で確認しなければならな

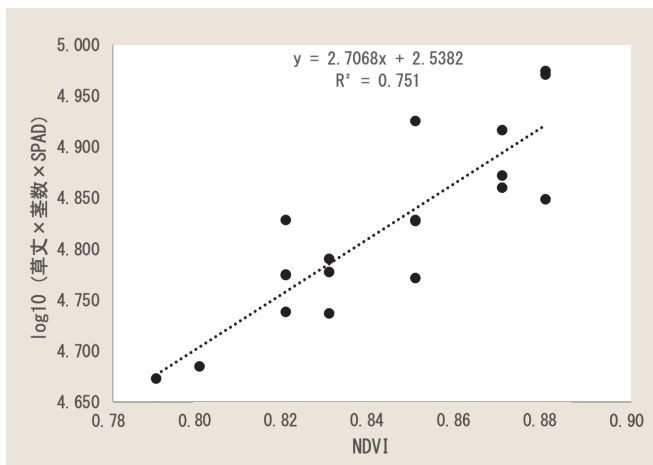


図1 ギャルビオFMのNDVI値と生育調査データの相関図

かった圃場の生育状況を、家にいながらパソコンの画面上で確認できるようになりました。竹内さんは、この新しい農業のやり方に可能性を見出し、中山間地域の課題に応えるツールであると手応えを感じました。

可変施肥により 圃場内の生育が均平化

圃場全体に均一に施肥をする従来の施肥方法に対して、地力・生育ムラに応じて圃場内で施肥量に強弱をつける施肥方法を「可変施肥」といいます。そして、地力・生育ムラを正確に把握できるギャルビオFMを使うことで、より精密な可変施肥を行うことが可能となります。2024年、四万十町でおよそ26haを管理する一般社団法人四万十農産とJA高知県がタッグを組み、水稻栽培でドローンによる可変施肥に挑戦しました。



2024年からドローンによる可変施肥に挑戦



JA高知県の竹内氏(左)と一般社団法人四万十農産の鈴木理事(右)

まず、比較的生育ムラの大きい圃場を選定し、7月8日の生育マップをもとに図2の施肥設計マップを作成しました。続いて、作成した施肥設計マップをドローン(T30 DJI)に読み込ませ、7月16日に可変追肥を実施しました。その結果、生育マップは図3のように変化しました。

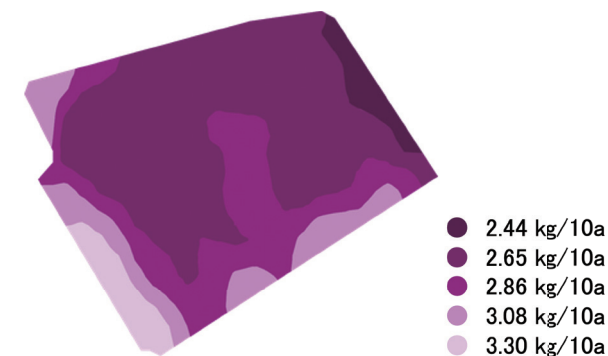


図2 7月8日の生育マップをもとに作成した施肥設計マップ



施肥設計マップ作成に使用した生育マップ

図3 可変追肥実施後の衛星マップの変化

当初は圃場の上側に生育の偏りがありましたが、



中山間地域という不利な条件だからこそスマート農業を導入し経営改善に取り組んでいる

可変追肥をきっかけにその偏りの位置が施肥設計マップ通りに逆転する結果となり、ギャルビオFMが的確に圃場の生育ムラを感知していることが確認できました。また、図3に示しているとおり、SPAD(葉色)の調査でも同じ傾向を確認できました。可変幅を調整することで、さらなる生育の均一化が期待できます。

生育予測機能で 全量1等級出荷を達成

四万十農産の近隣の圃場でも見られた現象ですが、標高差により生育ステージに差が生じてしまうのも中山間地域ならではの課題です。ギャルビオFMは1キロメッシュの細かい気象予測をもとに圃場ごとに生育ステージを予測できるため、2024年産の水稻栽培においても、大きく活躍しました。

鈴木理事は、日々JAと一緒にギャルビオFMの予測する生育ステージを確認し、適期に作業ができるよう努めました。その結果、酒米は全量1等級で出荷することができました。「昨年の1等米比率は8割ほどで、さらに今年は極端な高温により品質低下が予想されていたにも関わらず全量1等級となりました」と、ギャルビオFM+可変施肥の導入効果に満足げです。

「うちは圃場が点在しているから…」、「狭い圃場でスマート農業って難しいのでは?」と、中山間地域では敬遠されがちなスマート農業ですが、四万十農産ではそのような不利な条件だからこそスマート農業を導入し、経営改善に取り組んでいます。「経験だけに頼らない、データで可視化できる農業を進めていくことで、若い人が農業を楽しめる環境を作ることが自分の使命だ」と鈴木理事は地域振興にける思いを語ります。



大豆生産振興の新たなカギ! 産地の雑草対策を担うザルビオFMの雑草管理プログラム

JAおおいた 株式会社 浜小路農園

大豆生産の悩みのタネ

大分県の北部に位置する宇佐平野では広大な農地を生かした土地利用型農業が盛んに行われています。

当地域では米→麦→大豆の2年3作体系や麦→大豆の1年2作体系が主となっており、遊休農地を作らない作付で地域の環境保全にも寄与しています。しかし近年、その作付体系の要ともいえる大豆の収量が伸び悩んでいます。地力の低下や抵抗性病害虫の発生など様々な要因がありますが、最も大きいのは雑草害であると、この地域で長年農業を営む(株)浜小路農園の浜小路代表は語ります。



繁茂して圃場面積の半分を覆ったホオズキ

「近年地力の向上対策として堆肥を入れた圃場でこれまで見なかった雑草が出てきたり、異常気象に伴って除草剤散布時期の判断が難しくなり、雑草が蔓延する圃場が増えてきています。そのため大豆生産に関わる作業効率が低下し、近年営農意欲の低下に拍車がかかっているように感じます」。

雑草管理プログラムがもたらす様々な効果

そのような担い手からの声を踏まえJAおおいたの矢野TACは宇佐地区の大豆作における雑草対策強化に向けて全農大分県本部と連携し、ザルビオFMを活用した雑草管理プログラムの活用を2023年から提案しました。ザルビオFMの雑草管理プログラムは、困っている雑草種を圃場ごとに選択することで最適な散布時期と薬剤をユーザーに提案してくれる機能です。この機能を用いて雑草管理がどこまで効率的に行えるのかを検証しました。

ザルビオFM上で雑草管理プログラムを設定すると生育予測機能と合わせて圃場ごとに作業推奨のアラートが出ます。浜小路農園では浜小路代表だけでなく大豆圃場を管理する従業員

✓	耕起前除草 全面処理	10 - 4日 播種前
	混用	均一
	ラクトンアップ マックスR-2 NISSAN	0.5 L/10a
	合計散布液量	100 L/10a
✓	耕起	3 - 1日 播種前
✓	播種後出芽前処理 全面処理	BBCH 0 - 7
	混用	均一
	日産ワカ-乳剤 NISSAN	0.8 L/10a
	フルミロWDG SUMITOMO	0.01 kg/10a
	合計散布液量	100 L/10a
✓	茎葉処理 (大豆展葉極初期) 全面処理	BBCH 9 - 12
	混用	均一
	ハワ-カ-イザ-液剤 BASF	0.3 L/10a
	合計散布液量	100 L/10a
✓	中耕培土 (大豆展葉初期)	BBCH 13 - 14
✓	中耕培土 (大豆展葉中期)	BBCH 15 - 16
✓	茎葉処理 (大豆展葉後期) 全面処理	BBCH 17 - 18
	混用	均一
	BASF大豆ハワ-カ-液剤(ナトリウム塩) BASF	0.5 L/10a
	アタックショット乳剤 MARUWA-BIOCHEM	0.05 L/10a
	合計散布液量	100 L/10a

実際に作成したプログラム

雑草管理プログラム実施圃場



ほぼ雑草なし

全員のスマホにザルビオFMアプリをダウンロードし、アラートに則った散布体制を構築しました。その結果、管内の他圃場では雑草が大きく出ていても雑草管理プログラムに則って管理した圃場についてはほとんど雑草の被害が出ませんでした。また、作業の関係で雑草管理プログラムを設定したものの播種前に除草剤を散布できなかった圃場では、雑草が大発生しました。また、雑草管理がしっかりできた圃場ではプログラム導入前と比較し、収量が約2倍になりました。

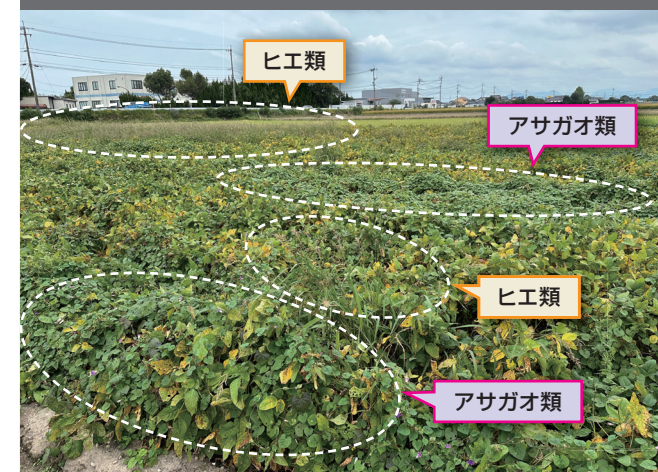
浜小路農園で大豆圃場を管理する山本氏はスマホでの活用を次のように語ります。「PCだけでなくスマホにも作業のアラート通知が来るので管理を忘れずに実施することができました。圃場で入力した作業履歴も事務所にいる代表が確認できるようになったり、スマート農業に取り組んでいる実感が湧いています」。

雑草管理プログラムの有用性についてJAおおいたの矢野TACは次のように評価します。「宇佐地区の場合、大豆作の管理作業は初期の段階で水稻の管理作業と一部被るところがあり、なかなか雑草対策がうまくいきませんでした。しかし、雑草管理プログラムを導入することで事前に作業計画を立てることができるようになり、ほかの品目の作業とのバッティングを回避できるようになったのは産地として大きなメリットだと感じています」。

今後の大豆生産振興のために

大豆雑草管理プログラムの活用で雑草対策が効率的に行え、収量増加にもつながることがわかった浜小

雑草管理プログラム非実施圃場



ヒエ類

アサガオ類

ヒエ類

アサガオ類

路代表は今後、大豆の作付面積を拡大していくと話します。「これまでは抑えきれなかった雑草を手作業で抜いたり追加で薬剤を振るのが当たり前でしたが、雑草管理プログラムの活用で余計な人件費や農薬衛生費が削減され規模を拡大していく目途が立ちました」。

さらに、この成功事例を県下に広げていくためJAグループは行政と連携し、大豆生産者が集まる研修会や各種説明会の場で講演をしています。県下で講演対応を行う全農大分県本部の営農対策課は、ザルビオFMのさらなる普及に向けて次のように語ります。「大豆栽培にザルビオFMを活用して2年目になりますが、大豆の収量増加を実現するツールとして自信を持って農家に勧めています。生育ステージ予測の精度が高いこと、防除タイミングのアラートがスマホで確認できること、比較的低コストで大きな効果が期待できることなどがその理由です」。

JAグループでは、適期作業を行うことができたという農家の高い評価を受けて、今後も多くの農家や関係機関へザルビオFMを紹介したいと考えています。

浜小路農園の皆さんとJAグループおおいた、全農本所のメンバー



Z-GISの利用開始から 圃場登録までの流れ

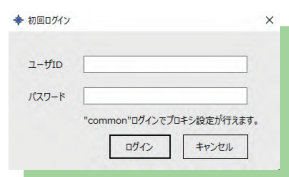
- 1 HPへアクセス
(URLまたは「Z-GIS」で検索)
<https://z-gis.net/99/pricing/index.html>



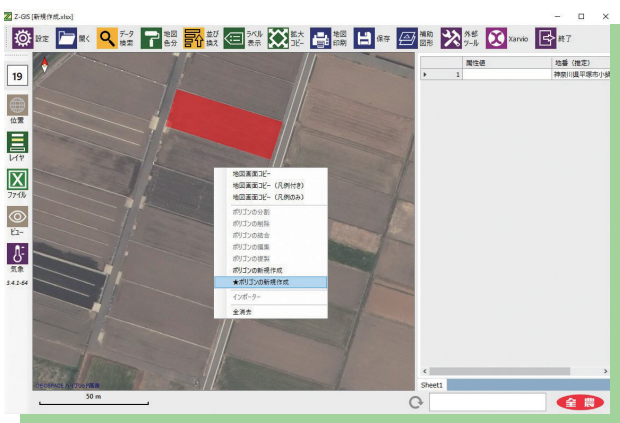
- 2 利用申込(オンライン、FAX、郵送)
※後日、ID・パスワードがメール送付される。
- 3 ダウンロード
※Z-GIS使用許諾契約書に同意する。

ID・パスワードが届いたら…

- 4 起動・ログイン……



- 5 圃場(ポリゴン)を登録



圃場(ポリゴン)登録後の機能

- ✓ エクセル上で入力・集計
- ✓ 圃場(ポリゴン)の色分け
- ✓ ラベル表示
- ✓ 地図の印刷 etc

地図とエクセルで営農管理が可能です!

スマホ版
Z-GIS HP



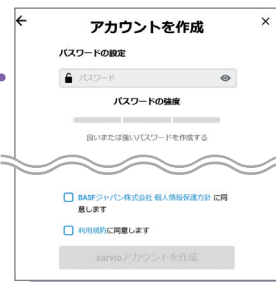
ザルビオFMの利用開始から 作付登録までの流れ

- 1 HPへアクセス
(URLまたは「ザルビオFM」で検索)
<https://www.xarvio-japan.jp/>

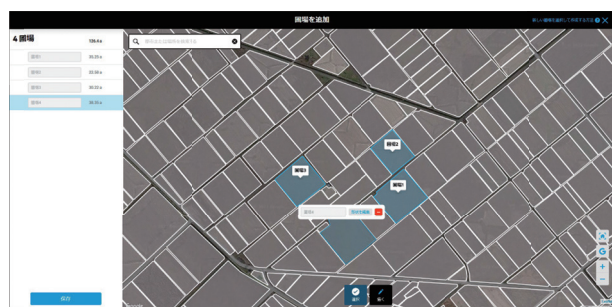


- 2 アカウント作成
※氏名、メールアドレス、電話番号、都道府県、所属するJAを入力する。

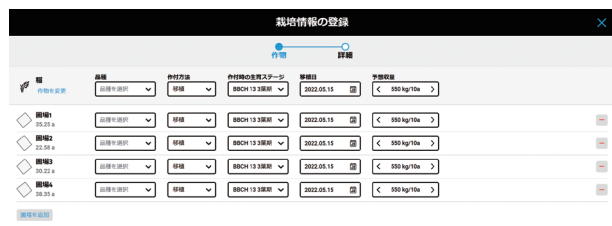
- 3 パスワード設定……
※個人情報保護方針と利用規約に同意する。



- 4 圃場(ポリゴン)を登録



- 5 作付登録(作物・品種・作付日など)



作付登録をすれば以下の機能が使用できます。
(作物により使用できる機能が異なります)

● 詳細情報は「Z-GIS」「ザルビオFM」で検索



JA全農 耕種総合対策部 スマート農業推進課

TEL.03-6271-8274

※Excel®は、Microsoft社の登録商標です。